

アルフォンス・ドーデの『アルルの女』に見る 恋愛の諸相に関する一考察

The Consideration on various aspects of love in “L’Arlésienne” of Alphonse Daudet

福留 邦浩*

Kunihiro Fukudome*

Abstract

This paper examines various aspects of love in “L’Arlésienne” of Alphonse Daudet, who is famous for his conte, “the last lesson” in Japan. The meaning of the tragic end of this play will be revealed in the context of the “Romantic love ideology”. The “love” has formed the central theme of the French literature since the Courtly love (Amour courtois) in 12th century. We can see various cases of love ; Courtly love, femme fatal, passion love, etc. in this play.

Keywords : love, Courtly love, galanterie, femme fatal, passion love, Romantic love

1. はじめに

アルフォンス・ドーデ (1840-1897) は、わが国では、以前においては小学校の国語の教科書に掲載されていた短編『最後の授業』の作者として、また、音楽好きには、ビゼーの劇音楽『アルルの女』の原作者として知られている、フランスの小説家である¹⁾。

『アルルの女』は最初、短編小説集『風車小屋だより』のなかの一編として発表された (1866) が、のちに、作者自ら戯曲に改作 (1872) して登場人物を増やし、それぞれの登場人物の心理描写を深化させた。

本稿は、アルフォンス・ドーデの『アルルの女』における、さまざまな恋愛に関する考察を通して、その結末の悲劇の意味を「ロマンチック・ラブ」の観点から明らかにしようとするものである。『アルルの女』は先ほど述べた通り、まず最初に、『風車小屋だより』と題された短編小説 (コント) の一遍として発表され、のちに戯曲に改作され、ビゼーが付帯音楽を作曲して広く知られることとなった。

フランスにおける恋愛は、12世紀のトルバドゥールの「宮廷風恋愛 (騎士道恋愛)」以来、今日に至るまで文学の王道のテーマを形成してきたが、ドーデの戯曲に登場するさまざまな人物が織りなす恋愛模様は、これらの恋愛の見本市のような様相を呈していると言っても過言ではない²⁾。

本稿は、それらのエピソードをフランス恋愛文学のさまざまな作品を引き合いに出しながら考察するとともに、結末の悲劇の意味について、今日のわれわれの「恋愛」観の基礎となっている「ロマンチック・ラブ」との関連性を探りながら、フランスにおける恋愛と結婚の諸相の一端を考察してみたい。

*日本経済大学経済学部商学科

2. フランスにおける恋愛小説の系譜

—『クレヴの奥方』と『マノン・レスコー』—

この章では、フランス文学史から、典型的な事例となる「恋愛」がテーマである作品を選んで系譜的にたどっておきたい。そして次の章において、それらが戯曲『アルルの女』に登場する人物像とどのようにオーバーラップするのかを考察することとする。フランス文学において、一般的に恋愛小説の嚆矢とされるのは、ラファイエット夫人の『クレヴの奥方』(1678)である。この物語における恋愛のありかたは、中世の「宮廷風恋愛 amour courtois」につながるものと考えられる。すなわち、『クレヴの奥方』は、眉目秀麗な若者が年上の美しい人妻に一途な愛をささげる物語であり、それは、中世の宮廷風恋愛において、若い騎士が、報われない片想いの愛を、年上の既婚の貴婦人に告白するという筋書きを想起させるからである。もとより「クレヴの奥方」というタイトルロールからすれば、物語の本筋は不倫の恋に直面した人妻の心理の葛藤ということになるであろう。

物語の舞台は、16世紀のフランスはパリ、国王アンリ2世の宮廷である。クレヴ公、公と結婚した新妻「クレヴの奥方」、そして新妻の宮廷デビューの舞踏会で出会った青年貴族ヌムール公の三角関係がテーマである。奥方とヌムール公は一目で相手に夢中になってしまうが、いわゆる「両想い」であるにもかかわらず、お互いに自分の本心を明かすことはなかった。

ここに出てくる「不倫」には性愛的要素はなく、あくまでプラトニックな関係である。クレヴ公と奥方の「結婚」が、愛情よりも家柄や財産のつり合いといった「打算」的な要素に裏打ちされているのに対し、相互に思いを募らせる奥方とヌムール公の不倫の関係こそ「純愛」の名に値するのではないか。しかし一方で、妻に不倫されるクレヴ公も誠実に若妻に愛を注ぎ、奥方以外の女性に気移りすることはない。結婚しているにもかかわらず、夫婦の関係は夫の妻への「片想い」である。この小説に出てくる男性は、いずれも女性に対し、自分の感情や欲望を優先させる行動よりも、相手に対する誠実な対応を心がけようとする。

この小説が書かれたのは17世紀のルイ14世の時代である。この時代の結婚も、前述のごとく、恋愛感情抜きで政略結婚であり、結婚後、配偶者以外の相手と恋愛するのは珍しいことではなかった。その点では『クレヴの奥方』は、当時の宮廷社会のありようを再現したものと捉えることが出来よう。しかし、クレヴ公や奥方、ヌムール公がプラトニックな関係を貫こうとした点は反時代的である。17世紀の恋愛は「宮廷風恋愛」のヴァリエーションであるが、「精神性を重視したプラトニックな傾向や真摯な悲劇性が失われ、恋愛を楽しむゲームの雰囲気加わった」[棚沢・草野(1995):98]。この性愛要素をとまなう恋愛関係は「ギャラントリー galanterie 趣味的恋愛」と称される。『クレヴの奥方』は、言わば時代に抗する「反ギャラントリー」なのである[野崎(2013):29-36]。

18世紀にはいると、ギャラントリーの風潮は一段と快楽主義的となっていった。この時代を象徴する作品として第一に挙げられるのがアベ・プレヴォーの『マノン・レスコー』(1731)である。『マノン・レスコー』は「ファミ・ファタル小説の元祖」として位置づけられる。ファミ・ファタルとは「男を死に至らしめる女」「男を破滅させる女」を意味する[東浦(2012):51]。

東浦氏はファミ・ファタルの条件として以下の3つをあげている。「①ファミ・ファタルが破滅さ

せるのは、彼女を心から愛し身も心も捧げた男ひとりだけである。②ファム・ファタルは私利私欲のために男を破滅させるわけではない。③男は破滅することに心のどこかで同意している」と〔東浦（2012）：53〕。

18世紀の文学について、野崎氏は次のように述べている。「(前略) ロココの絵画を何枚か眺めるだけで、そこにほかのどんな時代とも異なるエロチックな軽やかさ、デコラティブな艶っぽさが充満しているという印象をだれしも打ち消しがたいだろう。やわらかな曲線と薔薇色の色調、優美なモチーフ。すべてが観る者を誘惑しようとするかのように雅びで、ひたすら逸乐的だ。そうした絵画で飾られた本のページを繰ってみるなら、そこには色事の数々、恋愛の諸相が花開き、光彩陸離たる情景を見せつけている。しかも、性的放縦の行きつく果てまできわめようとする男女がいる一方で、逆に極端なまでの純愛主義をつらぬこうとする男女もいる」と〔野崎（2013）：39〕。「性的放縦の行きつく果てまできわめ」た典型の一つが、前述の『マノン・レスコー』であった。では後者の事例としてはどのような作品があげられるであろうか。野崎氏はルソーの『ジュリあるいは新エロイズ』（1762）とベルナルダン・ド・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』（1788）をあげている〔野崎（2013）：59, 71〕。

さらに言えば、フランス文学全体を通してみても、如上の二つの流れの恋愛の系譜をたどることが可能であろう。すなわち、先述した『クレヴの奥方』に端を発する「プラトニックな不倫」をも含めて今述べた「極端なまでの純愛主義」の系譜と捉えると、18世紀のルソーやベルナルダン・ド・サン＝ピエールを経て、19世紀のバルザックの『谷間の百合』（1836）、ジョルジュ・サンドの『愛の妖精』（1849）、さらに20世紀のレーモン・ラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』（1924）に至るまで、恋愛小説のひとつのジャンルをなしている。そしてもう一つのジャンルは、これも前述した『マノン・レスコー』に端を発する「エロチックな物語や悪人を描いた物語」や「不道德な物語」〔東浦（2012）：46〕である。このジャンルの後を継ぐのは19世紀のプロスペル・メリメの『カルメン』（1845）である〔東浦（2012）：63-74〕。

『クレヴの奥方』にせよ『マノン・レスコー』にせよ、恋愛は結婚と直接結びつくわけではない。「恋愛結婚」は全くないわけではないが、きわめて珍しいことなのである。では、いつから、どのような理由により「恋愛」が「結婚」に結びつくようになったのであろうか。次の章において、その点について確認することとしたい。

3. 「ロマンチック・ラブ」について

ヨーロッパにおいては歴史的にみると、恋愛と結婚は別のもと考えられていたことは前の章で確認した。近現代の「恋愛結婚」の誕生については、山田氏がこれまでの先行研究を踏まえて次のようにまとめている。「騎士道的恋愛（前述の宮廷風恋愛と同義、筆者）や宮廷恋愛（前述のギャラントリーと同義、筆者）では婚外恋愛が認められていたため、恋愛が結婚を脅かすことはなかった。『不義』を公に認めることで、恋愛が社会秩序を破壊する可能性は緩和されていたのである。だが、フランス革命以降、貴族に代わって近代ブルジョワジーが台頭する頃より、そうした状況に変化がみられ

ようになる。この頃、生殖を目的としない性交渉を姦淫・罪とみなすキリスト教倫理が広まったことから、『不義』は受け入れられないものとなってい」き、恋愛が社会秩序を脅かす危険物となった [山田 (2009) : 137]。そこで、恋愛と結婚を両立させるための工夫として考えられたのが恋愛を結婚のための前提条件とするという考え方であり、この恋愛結婚を支えたのが「ロマンチック・ラブ」という考え方である。

山田氏は「ロマンチック・ラブ」の特徴を次の4点にまとめている。すなわち、「1) 自らの意志や感情にもとづき、交際相手を選ぶ (愛の個人主義)、2) 愛のゴールには結婚がある (恋愛結婚)、3) いったん結婚すれば、配偶者以外の異性と性交渉や親密な交際をしない (性・愛・結婚の三位一体)、4) 一人の人と添い遂げる (関係の永続性)」の4点である。 [山田 (2009) : 137]。

では、このような考え方はどのようにして、かつての貴族のような特権階級の枠を超えて、広く普及していったのであろうか。宗意氏によれば、恋愛が結婚の前提条件となる「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」の一般化に、大きく与って力があつたのが適齢期女性たちの読書体験であるという。宗意氏はこの間の事情を次のように説明している。「18世紀産業革命が西欧人のロマンチックラブの情熱をかきたてた。産業革命は生産力の画期的な増大だけでなく、生産基盤を農村から都市へ移動させた。人々は農場から引きはがされ、同時にお膳立てされた結婚を強要する家族からも切り離された。産業革命を推進した多くの経済的、社会的な要因の結果、結婚相手も自分で選択したいと考えられるようになる。恋愛結婚の観念は新たに勢力をつけた新興富裕層から急速に拡大していく。その背景には確かに小説の力があつた」と [宗意 (2014) : 43]⁽⁹⁾。

以上、フランス革命以後のブルジョワジーの台頭により、以前の貴族社会の道徳規範が批判され、「正しい」恋愛とは結婚を前提とするものであり、結婚を前提としない恋愛は不道徳とされるに至ったことを確認した。

次の章では、19世紀後半の小説家アルフォンス・ドーデの戯曲『アルルの女』を題材として、当該作品のなかに出てくる3つの恋愛情景がフランス文学史における恋愛文学の系譜において、どのような意味を持つのかを考察し、さらにそれらが、19世紀ヨーロッパにおける「ロマンチック・ラブ」の概念によって分析してみたい。

4. 『アルルの女』に見られる3つの恋愛の考察

これまでの章において次のようなことを確認してきた。すなわち、第2章においては、ヨーロッパにおいて、長いこと恋愛は結婚とは別のものであること、今日の感覚からすれば容認しがたい「不倫」が、必ずしも排斥するべきものではなかったこと、そして結婚は互いの愛情よりも家柄や財産のつり合いという観点から成立する打算的な社会的結合であり、結婚後の「不倫」関係が、むしろ「純愛」の様相を呈すること、以上である。さらに第3章においては、市民革命と産業革命を経て、王侯貴族の古い価値観が否定され、新たに興隆してきたブルジョワジーの価値観に基づいた新しい恋愛観(結婚観)が誕生したてきたことを見てきた。

この章では、第2章および第3章で確認したことを踏まえて、アルフォンス・ドーデの『アルルの

女』を考察してみたい。

この物語に登場する第一の恋愛は、南仏はローヌ川のほとり、プロヴァンスはカマルグ地方のカストゥレの、ある豪農の屋敷を舞台として繰り広げられる。一家の主人フランセ・ママイの孫フレデリは、カマルグ近在で一番の都会であるアルルに住む若い女にのぼせ上ってしまい、この女との結婚を母親と祖父に懇願する。この女性こそ、タイトルロールの「アルルの女」であるが、このアルルの女は、最後まで姿を現すことはない。登場人物の会話の端々に「アルルの女」は出てくるが、彼女は最後まで書き割りの背後から出てくることはない [Roche (1976) : 44]。彼女の人となりについては、アルルの女全般の形容として「きれい *belle*」で「おしゃれ *coquette*」だという以外、具体的な描写は出てこないのである。[Daudet (出版年不明) : 21, Daudet・桜田 (1988) : 20]。しかし、フレデリの人生を破滅させるという点において、『マノン・レスコー』の後継たるファミ・ファタルの系譜に連なる女であることは明らかである。

この物語は、「アルルの女」との結婚を切望する農家の若者と周囲の人間の苦悩を描いている。しかし前章で見たようにフランスのみならずヨーロッパにおいては、そもそも恋愛と結婚は直結するものではなかった。一家の家長であり、フレデリの祖父であるフランセ・ママイや、フランセ・ママイの息子の嫁でフレデリの母親のローズは、「アルルの女」を、農家の嫁としてはふさわしくないとはいつつ、溺愛するわが子のために、「当世風」の「恋愛結婚」をしぶしぶ認めている。自分たちが若いころの常識では、好きになった相手と結ばれることなど考えられなかったことだった。戯曲の中でも、フランセ・ママイと奉公人の長老のバルタザールとの会話が、そのことに触れている。

- フランセ・ママイ …おまえ、この嫁とりをどう思うね？…今度のことは、お前の気に入らないのかね？
- バルタザール そうだ、気に入らないのだ。
- フランセ・ママイ だが、しかたがないじゃないか…あの子は町の^{おなご}女子が欲しいっていうんだから。
- バルタザール それがいけないんだ…わたらの時代には、親父が「こうする」といって決めたもんだ。今じゃ子どもがきめる。おまえさんは自分の子を当世ふう^にに育てなすった。まあ、お手並みを拝見しましょう。
- フランセ・ママイ まったく、あの子のわがままは、いつも通させてきた。少し甘すぎたかもしれない… [Daudet・桜田 (1988) : 8-10]

ここでは、大革命以前の「わたらの時代」の恋愛観から、大革命以後の「当世ふう」の新しい恋愛観への変遷を批判的に見ながらも、諦念とともに受け入れざるを得ない旧世代の本音をうかがい知ることができる。

では、祖父や母親、使用人の長老ら「旧世代」は息子にふさわしい嫁をどう考えているのだろうか。バルタザールは主人にこう意見する。「あれに嫁をもらうなら、どこかこの近くで、針仕事のじょうずな、気のきいた、なんでもできる、せんたくもやればオリーヴも摘めるいい女、つまりちゃんとし

た百姓の娘を見つけたほうがよかったね」と。これに対しフランセ・ママイは「そうだ！まったくこの土地の女なら申し分ないのだが…」と応じ、二人のめがねにかなう女性として、「このカマルグにだって、めつけものはあるさ…そら、そんなに遠くへ行かなくても、おかみさん（ローズ、筆者注）の名づけ子のヴィヴェット・ルノー、刈り入れの時にここへ手伝いに来る…あれなんか、よかったのになあ！」と考える [Daudet・桜田（1988）：9-10]。

フランセ・ママイは、アルルの女が自分たちの家の嫁としてふさわしいか、自分のもう一人の息子、フレデリにはおじにあたるマルクに、女の人となりを調べさせる。首尾は上々、いよいよ結婚の段取りを本格化させようとした矢先、実はアルルの女には昔から情を交わした男がいることが発覚し、フレデリはすっかり絶望してしまう。以上がフレデリのアルルの女に対する恋である。

次に二つ目の恋として、ヴィヴェット・ルノーに焦点をあててみたい。ヴィヴェットはフレデリとは近所の幼馴染で、密かにフレデリに好意を寄せている。しかし生来内気で、フレデリに自分の思いを伝えることができないでいる。フレデリの母親ローズは、アルルの女の多情に傷ついている息子に、今こそ自分の思いのたけを告白するよう、ヴィヴェットを促す。ヴィヴェットは思い切って自分の思いをフレデリに伝えるが、フレデリはヴィヴェットの精いっぱい告白を、にべもなく拒否してしまう。

ヴィヴェット 私、あなたが好きなんですもの…

フレデリ （びっくりして）おれが好き？

ヴィヴェット ええ、ずっと前から…小さい時分からですわ！

フレデリ おれを好きになって、ふしわせだったね、ヴィヴェット…おれはお前なんか好きじゃないんだ。

勇を鼓してフレデリに愛の告白したヴィヴェットの心を、アルルの女に夢中のフレデリは、残酷な言葉で踏みつける。しかし、そんなフレデリのことをヴィヴェットは嫌いになれない。ヴィヴェットはフレデリへの恨みつらみは口にせず、むしろ男の傷心を思いやりながらも、毅然と別れを告げ、フレデリの前から永遠に立ち去ろうと決意する。

ヴィヴェット お母様はあなたをずいぶんかわいがっていらっしゃるわ！…あなたの苦しんでいるのがとてもご心配なの！あなたが誰かと親しくなったらいいだろうってお考えになって、それで私をあなたのところへお寄越しになったのよ…お母様がなんともおっしゃらなければ私、来やしません。お願いなんかしませんわ。今までどおりでよかったの。ここへは年に二、三度来て、来る前に長い間楽しみにして、あとではもっと長くそのことを思いだして…あなたのお声を聞くこと、あなたのそばにいて、それでもう充分ですわ…あなたのうちへ行く時、あの入口を見ただけでどんなに胸がどきどきしたか、あなたにはわかりませんわ。（フレデリ感動の様子）私のふしあわせなことったら！小さいけれど、私の生

活を満たしてくれていたそのしあわせが、今とりあげられてしまいました。これでもうおしまいです。よくおわかりでしょう…こんなことお話ししてしまっはもうあなたの前にはいられませんわ。二度と来ないように、遠くへ行ってしまうなければ。[Daudet・桜田 (1988) : 49-50]

このヴィヴェットの切ない告白に対し、フレデリは、自分の心の痛みに圧倒されるばかりで、ヴィヴェットの心が傷つくことにまで気が回らず、「お前の言うとおりのだ。どこかへ行っておしまい、そのほうがいい。」とつれない言葉を投げつける。

しかし、フレデリはヴィヴェットに対する態度は、ある意味誠実であるともいえる。それは裏を返せば、フレデリはアルルの女への一途な愛を証明するものである。第3章において、「ロマンチック・ラブ」の4つの特徴を確認したが、フレデリはアルルの女への思いは、これらの特徴をすべて満たすものである。問題は、両思いの恋愛が結婚に直結することが「ロマンチック・ラブ」であるのに、フレデリはアルルの女への思いは一方通行になってしまっていることである。

一方通行の愛といえば、ヴィヴェットのフレデリへの愛もそうである。自分がどんなにフレデリを愛していても、その愛が成就されることはないことは自分でもわかっている。自分もフレデリと同様の片思いに苦しみながらも、フレデリのように身も世もあらぬ愁嘆場を演じたりはしない。激情に流されることなく、理性によって傷ついた自分を冷静に見つめる。その点では、ヴィヴェットの愛は17世紀の「理性的な愛」をほうふつとさせる [東浦 (2012) : 26-27]。

しかしながら、理性によって感情を制御した17世紀的な愛の典型と考えられるのは、むしろフランセ・ママイの相談役として信頼厚い使用人頭のバルタザールの「秘めたる恋愛」であろう。フレデリが、自分の苦しみはバルタザールにはわからない、と言い放つとバルタザールはフレデリに自分の青春時代の苦しい恋愛体験を話して聞かせる。

フレデリ	どんなにおれが苦しいか、おまえにはわからないんだ。
バルタザール	わかってるよ！おまえさんの苦しみはよく知っている。おぼえがあるのだ。
フレデリ	おまえに？
バルタザール	そうだ、わしに…（わしは 筆者補）好きなんだが義理にはばまれるというあの恐ろしい苦しみを味わった。その時わしは二十歳だった。ここから近い、ローヌ河の向こう岸の家に使われていたが、そこのおかみさんがきれいな人だったので、わしはすっかりほれちまって…決して一しよに恋を語ったりはしなかった。ただ、わしが一人で牧場にいると、その女がやって来て、わしの隣にすわって、微笑むのだ。ある日その女がわしに言った。『出て行ってちょうだい！…私は今ほんとうにお前さんを愛しているから』…そこで、わしは出てしまった。そしてお前さんの御祖父さんのとこへ雇われることになったんだ。
フレデリ	で、おまえたちは、それきり会わないの？

バルタザール 一度だって。しかしお互いにそんなに離れてはいなかった。それにこの恋をしてから何年もたったけど、ごらん、今でもその話をすると涙がこぼれるほど、わしはその人を思っているのだ…とにかくわしは満足だ。義理を果たしたからな。お前さんも義理はつくしなさいよ。…[Daudet・桜田(1988):43-44]

あの分別臭いバルタザール爺さんが人妻と恋に落ちたことがある！そしてその人妻とは、ヴィヴェットの祖母のルノー婆さんで、ローヌ河を隔てて、二度と会わないと誓いつつ、二人は心の奥に互いへの思いを秘めているのである。

5. まとめにかえて—『アルルの女』における悲劇的結末について—

その後、フレデリは不実なアルルの女との結婚を断念し、誠実なヴィヴェットとの婚約を決意する。自分を深く愛してくれているヴィヴェットの愛に応えること—「ロマンチック・ラブ」ならば、ここで大団円となる。しかし、フレデリは結末において自ら死を選んだ。彼はなぜ自殺せねばならなかったのか、最後に、これまでに論じたことを踏まえて、この作品から読み取れることについて論じてみたい。

「恋愛」が「結婚」に直結する「恋愛結婚」が成立するには、当事者双方が相手に恋愛感情をいだいている「両想い」であることは当然であろう。「恋愛結婚」にとって、「片想い」は何の意味も持たない。フレデリは「アルルの女」に情熱的に恋焦がれて結婚を切望するが、「アルルの女」が別の男とも親密な関係であることを知らされ、結婚を断念する。そして、自分を深く愛してくれているヴィヴェットの愛を受け入れ、彼女といったんは婚約するが、その婚約の祝宴当日、「アルルの女」が男と出奔することを知り、嫉妬の余り納屋の2階から飛び降りて命を絶ってしまうのである。

フレデリは「アルルの女」への想いを断ち切ることができなかった。恋愛結婚が唯一の結婚のありようであるとすれば、フレデリとヴィヴェットの結婚は正当化されえない。これが革命以前であれば、フレデリとヴィヴェットは結婚していたかもしれない。家柄や環境、経済状況において釣り合いのとれる相手を親が決め、その相手と結婚する。そのことによって社会生活も円滑に営まれる。そして、バルタザールのように胸に思いを秘めて生きていくかもしれないし、ヴィヴェットとの結婚生活をよそに、アルルの女との不倫にのめりこむかもしれない。前者であれば、肉体的な不貞行為がないという点において、19世紀版の『クレヴの奥方』となるかもしれない。ただし、根本的に異なっているのはフレデリとアルルの女が相思相愛ではなく、フレデリの恋愛が片想いであるという点である。

むしろ二人の関係のありかたという点から見ると、どちらかといえば二人の関係は『マノン・レスコー』のマノンと騎士デグリユの関係に近いのではないか。すなわち、男を翻弄するファム・ファタルと、彼女に一途に身を捧げる若い男の構図である。異なるのは、最終的に命を落とすのが、『マノン・レスコー』においては、自らの不実を後悔するファム・ファタルのマノン・レスコーであるのに対し、『アルルの女』においては、懸想する男フレデリであるという点である。『アルルの女』の悲劇は、結婚が相思相愛の「恋愛結婚」でなければならないという考え方がもたらした不幸なのではない

だろうか。

片思いの末に命を絶つ若者の一方的で激情的な恋は、ロマンチック・ラブの観点からは恋愛とは認められないかもしれないし、一步間違えればストーカーになってしまう。たかが失恋したくらいで命を粗末にするとは愚かしい、というもっともな、しかし身もふたもない意見もある。また、アルルの女への思いを胸に秘めたままヴィヴェットと結婚することは不誠実極まりないという批判もできよう。しかし、そのように簡単に割り切れないところにこそ恋の喜びがあるのだと信じたい。

注

- (1)『最後の授業は』1985年以降、国語の教科書から姿を消した。田中克彦や蓮見重彦によって『最後の授業』が批判的に取り上げられ、多くの研究がなされている。アルフォンス・ドーデの先行研究に関しては、前記の研究を含めて、山根氏の博士論文に詳しくまとめられている [山根 (2015) : 133-139]。『アルルの女』をとりあげて論じたものとしては、宮澤氏の論文があるが、これは戯曲ではなく、短編のほうであり、また、フランス語教材としての側面に焦点を当てて論じている。
- (2)「恋愛は12世紀の発明である *L'amour, c'est une invention du XII^e siècle.*」とは、フランスの歴史家シャルル・セニョボスが述べた言葉とされるが、片山幹生氏によればこれは一種の神話である。また、小谷野敦氏はトルヴァドゥール以前の文学、さらにはヨーロッパ以外の文学においても、「恋愛」の展開を見て取ることができることを指摘している。
- (3)宗意氏は18世紀イギリスにおける「貸本屋（巡回図書館）*circulating library*」の役割に注目している。

アルフォンス・ドーデ年譜 [Roche (1976) : 13-14]

- 1840 5月13日、ニーム Nîmes で誕生。
- 1845 家族とともに過ごす、プロヴァンス語の使用は厳しく制限された。
- 1848 二月革命および第二共和政成立に大きく影響を受ける。
- 1849 リヨンに一家で転居。
- 1851 ルイ・ボナパルト、皇帝となり、第二帝政開始。
- 1857 5月1日から10月28日までアレのコレージュに通い、11月1日パリに上京。
- 1858 パリのさまざまなサロンに迎えられ、自作の詩を朗読。詩集『恋する女たち』発表。マリー・リュウと恋愛関係になるなど、「ボヘミアン」な生活を送る。
- 1859 パリに出てきていた同郷のプロヴァンス語の作家フレデリック・ミストラルと知己となる。
- 1860 モルニー公爵の秘書となる。
- 1861 このころ健康悪化。医者勧めで温暖なアルジェリアへ旅行する。
- 1862 再び医者勧めでコルシカに旅行。以後、サルディニアやプロヴァンスにも旅行する。
- 1865 モルニー公死去。以後、文学活動に専念する。
- 1866 『風車小屋だより』第1作発表。ゾラの紹介で、後の妻ジュリア・アラールと知り合う。アルザス、バヴァリア、スイスに旅行。
- 1867 ジュリア・アラールと結婚。息子レオン誕生。
- 1868 『プティ・ショーズ』発表。
- 1870 普仏戦争勃発。パリ・コミューン。ドーデは国防軍に加わる。
- 1872 戯曲『アルルの女』をヴォードヴィル座で上演するが失敗。
- 1873 短編集『月曜物語』発表。『最後の授業』はこの中の一挿話。
- 1879 ドーデを死に至らしめる病の最初の深刻な病状があらわれる。
- 1884 『サフォ』。このころから、病氣と文学活動、慈善活動が主要な関心事となる。
- 1885 『アルルの女』オデオン座にて再演、大成功を収める。以後、『アルルの女』は同劇場のレパトリーとなり、ビゼーによる付帯音楽とあいまって、世界的な人気を得る。
- 1895 イギリス訪問
- 1896 イタリア訪問
- 1897 12月16日死去

文献一覧

- Daudet, Alphonse (出版年不明). *L'Arlésienne*, Gérard Billaudot Editeur, LIBRAIRIE THEATRALE, Paris.
- Daudet, Alphonse (1872). *L'Arlésienne* (桜田佐訳 (1988)). 『アルルの女』, 岩波文庫).
- La Fayette, Marie-Madeleine de (1678). *La Princesse de Clèves* (生島遼一訳 (2013)). 『クレヴの奥方』, 岩波文庫).
- Prévost, Antoine François (1731). *L'Histoire du Chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut* (青柳瑞穂訳 (2017)). 『マノン・レスコー』, 新潮文庫).
- Roche, Y. Alphonse (1976). *Alphonse Daudet*, TWAYNE Publishers.
- 小谷野敦 (2012). 『日本恋愛思想史：記紀万葉から現代まで』, 中央公論社.
- 片山幹生 (2018). 「『恋愛の誕生』をめぐる言説 シャルル・セニョボスの『神話』の形成について」, 『フランス語フランス文学研究』, 112 巻, 51-63 頁.
- 棚沢直子、草野いづみ (1995). 『フランスには、なぜ恋愛スキャンダルがないのか?』, はまの出版.
- 谷本菜穂・渡邊大輔 (2016). 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考 — 恋愛研究の視点から —」, 『理論と方法』, 31 巻 1 号, 55-69 頁.
- 東浦弘樹 (2012). 『フランス恋愛文学を楽しむ』, 世界思想社.
- 野崎 欽 (2013). 『フランス文学と愛』, 講談社現代新書.
- 宮澤一郎 (2014). 「アルフォンス・ドーデ『アルルの女』を読む」, 『研究論叢』 84, 303-317 頁.
- 宗意和代 (2014). 「西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察」, 『国際日本学論叢』, 第 11 号, 39-60 頁.
- 山田陽子 (2009). 「恋愛の社会学序説 — “コンフルエント・ラブ” が導く関係の不確定性」, 『現代社会学』 (10), 133-144 頁.
- 山根祥子 (2015). 『日本におけるアルフォンス・ドーデの移入と受容：その評価の変遷』, 博士論文甲第 12275 号, 九州大学学術情報リポジトリ, (https://catalog.lib.kyushu-ac.jp/opac_download_md/1500474/scs0245.pdf#search=%27%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%83%89%E3%83%BC%E3%83%87%E7%A0%94%E7%A9%B6%27) (2018 年 7 月 31 日最終検索).